

「交響曲第8番」世界初演ライブ録音

新譜月評 交響曲

The Record Geijutsu Disc Review

終楽章は若々しい第1主題となめらかな第2主題の対照がよく、第3主題から小結尾にかけての表情もすこぶる妥当である。このように各部の表情が明快かつ決然としており、わずかなアゴギクも有効に機能している。展開部はやや深みに乏しいくらいはあるが、ゆたかな共感が示され、ふくらみのある弦の響きが美しい。意欲的な演奏が好ましい指揮者と楽団である。

問題の第3楽章アダージョは、従来知られた2つの稿の折衷といってもよい。しかし後半はさまざまな異同があるのがおもしろく、それなりによくなるともめられている。1887年稿が1890年稿に改訂されるプロセスを明示するという意味でも非常に興味深い。演奏は初演ということで慎重に行なわれた印象を受けるが、指揮者の声もまじえて感興にあふれ、演奏ともに立派なものである。むしろクライマックスの強烈な盛り上がりもよい。

小石忠男 ● Tadao Koishi  
進 大阪の川崎高伸氏といえは知る人ぞ知るブルックナーの研究者で、日本ブルックナー協会の機関紙に寄せられた多くの論文は、深い洞察力と新鮮な視点によって、私などもいろいろと啓発された。その川崎氏が1999年夏にオーストリア国立図書館所蔵のブルックナー関係資料を調査された際、そのなかから「第8交響曲」の従来知られなかつたアダージョ楽章が筆写譜として完全な状態で存在することを発見された。その譜面を英国の研究者タムモット・ゴルト氏と共同作業で校訂・編集され、アダージョ2（1888?）として紹介されたのが、このディスクに用いられた楽譜である。



内藤彰指揮 東京ニューシティ管弦楽団  
[デルタ・クラシックス®]  
DCCA0003] ¥2625

ブルックナー「交響曲第8番」(第1、2、4楽章)ノヴァク版第2稿、第3楽章IIアダージョ2

ブルックナー新稿の世界初演シリーズ 第2弾

第40回定期演奏会 「交響曲第4番」

Concert Reviews

これに先立つ前半には、バリで研鑽を積んだピアノリスト稲田潤子によるラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」が組まれていたが、豪快さとエレガントさを合わせ持つ、稲田の持ち味を損なうことなく的確にまとめ上げる内藤の好サポートが光った。(7月5日・東京芸術劇場)

しかし何よりも感心したのは同オケのレヴェルの高さにある。冒頭のホルンの素晴らしさはもとより、弦バートのクオリティの高さ(第2楽章のヴィオラは絶品、最強奏でのバランスの取れた音響、そしてよく整えられたアンサンブルなど、新興のオケ(1990年設立)とは思えぬ最上質の演奏が繰り広げられていた点に、この世界初演の意義を確実なものにする一翼を担ったと実感。

とりわけ終楽章の再現部における第1主題の「カット」は、シヨッキングで、つまり再現部が第2主題からダイレクトにつながる。文脈には、これがブルックナーの真意なのか?と疑問を投げつけるような驚きと重みがあった。また強弱やテンポ設定など細部にわたり修正が施されているところも丹念に演奏に反映させており、従来の曲の解釈とのニュアンスや感度の違いも興味深いところであった。

何と云ってもブルックナーの「交響曲第4番」の「第3稿」(国際ブルックナー協会版)による世界初演が目玉だった。この「第3稿」についてはスベースの関係上、詳述は差し控えるが、いずれ検証や論議を呼ぶことは疑いない(CD発売の予定があるらしい)。今回の演奏は、当夜指揮した内藤彰が述べているように、ブルックナーの意思を最も反映した最終決定版」という信念にも近い確信的な解釈が隅々まで行き渡った印象が強い。

東京ニューシティ管弦楽団(第40回)

第45回定期演奏会 「ロメオとジュリエット」

Concert Reviews

後半は、曾我自身が作曲した(ロマンティズムへの追憶——ロメオとジュリエットの幻想——)の世界初演が始まった。物語に沿ったロマンティックな12分ほどの作品、わかりやすい曲だが、各シーンを短い時間で駆け巡って終わったという印象を受けた。最後はバーンスタインの(ウエスト・サイド・ストーリー)から(シンフォニック・ダンス)と(サムホエア)。前者は快活なテンポでの鮮やかな演奏。後者はサブライズ・ゲストの曇谷ひとみ歌った。

とにかくいろいろな趣向を凝らして聴衆を楽しませようとする意志の感じられるコンサートだった。4月18日・東京芸術劇場 ● 山田治生

東京ニューシティ管弦楽団(第45回)

首席指揮者になったばかりの曾我大介が「ロメオとジュリエット」にまつわる作品を取り上げた。

まずは、チャイコフスキーの「幻想序曲(ロメオとジュリエット)」の第1稿。聴き慣れた決定稿とはかなり違う初稿の演奏は、とても興味深いものであった。曾我は手堅くまとめあげたが、劇的な緊張感には物足りなさを感じた。曾我にとっては次のプロコフィエフの(ロメオとジュリエット)抜粋(5曲)の方が相性が良さそうだった。演奏が生き生きとして、表現が大胆になり、オーケストラも色彩感を増した。